

"Truth for its own Sake"
シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における
反カトリシズム(1)

"Truth for its own Sake"
Anti-Catholicism in Charlotte Brontë's *Villette* (1)

森 ゆかり
Yukari MORI

Abstract Ultramontane aggressiveness of the newly-appointed Cardinal Archbishop of Westminster, Nicholas Wiseman drove the Protestant Kingdom into near frenzy in 1850, when the Catholic hierarchy was restored for the first time since the Reformation in England. The purpose of this paper is to show how the Anti-Catholicism in Mid-Victorian England was reflected in Charlotte Brontë's last completed novel, *Villette* (1853). Ultramontane aggressiveness was manifested in 1) its emphasis on the temporal as well as the spiritual powers of the Pope; 2) its extravagant Romish rituals and novel devotional practices; 3) its efforts to make numerous and highly influential Anglican converts to the Roman Catholicism. The first two sections deal with those three aspects of triumphant Ultramontanism and demonstrate how they are evidenced in various passages in *Villette*, by comparing with the contemporary literatures by Lord John Russell, Thomas Carlyle, Charles Kingsley and Catholic John Henry Newman. For Charlotte, "Truth" was construed with the essence of the Protestantism in England, as we can see in one of her letters written at the time of the "Papal Aggression" in 1850. Part I of this essay explores "Falsehood" of the Roman Catholic Church as described Protestant critics, especially in its triumphant Ultramontanism.

英国ヴィクトリア朝における反カトリシズムについては、その先駆的研究となったBest (1967)をはじめ、Norman (1968)、修道院査察についての詳細な研究であるArnstein (1982)、またヴィクトリア朝反カトリック運動を担ったプロテスタント諸団体に関するWolffe (1991)、Paz (1992)等¹の先行研究が存在するが、本考ではこれら諸研究を踏まえた上で、Charlotte Brontë (1816-1855) が、ブリュッセル留学(1842-1844)中の体験を基に執筆した小説 *Villette* (1853)に見られる反カトリシズムの諸相を考察することにする。

*Villette*に見られる反カトリシズムの起源を探るためには、北アイルランド出身で英国国教会牧師で

あった父Patrickの反カトリシズムに加え、シャーロットのブリュッセル、エジエ寄宿学校留学時代、及び *Villette* 執筆の二つの時期に遡る必要があるといえる。校長エジエ氏を思慕するシャーロット、それに気が付き二人の間を引き離そうとする妻との葛藤をはじめ、カトリック国に滞在する孤独なプロテスタント外国人としての苦汁に満ちた体験は、*Villette* で主人公ルーシー・スノウとムッシュ・ポールを引き裂くために策略を廻らす女性校長マダム・ベックのプロットや、ルーシーが表明する反カトリック観に直接または間接的に反映しているときられている。しかしながら、この点については、Gérin (1967)²をはじめ伝記的研究が多くなされているので、本考では、特に後者、*Villette* 執筆期に焦点をあてて、論考を進めていくことにする。

シャーロットが *Villette* の執筆を開始する前後の世相を見てみよう。まず1850年9月29日、ローマ教皇Pius 9世(1792-1878)書簡 *Universalis Ecclesiae* によって、宗教改革以来はじめてイングランドとウエールズにカトリック位階制が復興、10月7日枢機卿Nicholas Wiseman (1802-1865)がウエストミンスター大司教就任、彼の司教教書 "Out of the Flaminian Gate"³は、プロテスタント英国反カトリック感情に油を注ぐこととなる。こうした中、Lord John Russellの "Durham Letter"⁴が11月7日付 *The Times* に掲載されたのをきっかけに、英国各地で "No Popery" の署名嘆願活動が開始され、全国で総計2616件の署名嘆願書が887,525名の署名を集めたという(これは当時、イングランド人口の約5パーセントに当たる)⁵。シャーロットの父パトリックも、地元紙に自ら反カトリック見解を投稿しており、また後に彼女の夫となる Arthur Bell Nicholls は、同年11月27日 Leeds で行なわれた署名嘆願集会に出席している。⁶

シャーロットは *Villette* 脱稿後、出版者 George Smith 宛に、この作品が時事問題を扱ったものではないと主張している⁷ にもかかわらず、*Villette* に見られる反カトリック的言説は、位階制復興前後、反カトリック論壇が行なった、教皇権、告解、倫理神学等に関するカトリック批判と、多くの点で平行性を示しているのは注目に値する。*Villette* に見られる反カトリック的言説については、Burkhart (1973)、Clark-Beattie (1986)、Lawson (1991)、特に *Villette* 執筆期を扱った McGlamery (1993)、Bernstein (1997)⁸ 等の研究があるが、本考察では上述のラッセル卿に、反カトリック論壇の指導者でもあった Charles Kingsley (1819-1875) と、1845年に英国国教会からカトリックに改宗、1851年には反カトリック論者の Giacinto Achilli (1802-1860?) から名誉棄損で訴えられていた John Henry Newman (1801-1890) の論争等も加えて、当時の反カトリック言説がどのようなものであったのかを比較検討する。

更に本考では、嘘とあいまいな言葉の使用 (equivocation) に関する St. Alphonsus Liguori (1696-1787) 等、カトリック倫理神学についての当時の誤解から、カトリック教会が『真理』の敵であるとされていたことを踏まえ、*Villette* 39章で描写される『真理』が小説内でどのような役割を

果たす可能性があるのかを指摘する。

I. "Papal Aggression" としての位階制復興

ワイズマンは、1840年英国に帰国するまでの22年間をローマ英国学寮で過ごし、ピウス9世をはじめ、教皇庁、また当時英国カトリックを直接管轄していた宣教聖省での信望も厚く、自他ともに認める教皇至上主義、ウルトラモンタニズムの担い手であった。ウルトラモンタニズムとは、18-9世紀、啓蒙主義・合理主義思想の台頭に加えて、フランス革命、ナポレオン時代の教会混乱のため、ローマ教皇権強化を通して教会の自由を進展させようとした運動をいう。具体的には、各国教会の特徴、例えば固有の典礼上の習慣を放棄してローマ教会の慣行に従い、その規律を受容する他、司教任命の際の教皇首位権拡大をはかり、教会の中央集権化を目指すものである。⁹

しかしながら、大陸のウルトラモンタニズムは、以下で詳述するように、アングロ・サクソン主義の英国国民意識に真っ向から対立するものであり、ローマ滞在期間が長かった分、英国国民のプロテスタント感情について十分な理解を欠いていたワイズマンは、帰国後も教皇庁国務長官 Antonelli 枢機卿から、反カトリック感情を煽らないよう、英国内で霊的権威を派手に示すことは一切慎むように警告されている。¹⁰しかしながらウエストミンスター大司教として発布した最初の司教教書は、女王至上主義の英国プロテスタントが最も嫌悪する、外国からの霊的権威による侵略、これをまさに裏書きするような文面で満ちたものとなっている。署名にある "the Flaminian Gate" は、古くローマに入る際に必ず通らなければならなかった場所であり、霊的救済に至る唯一真正の教会としてのカトリック、復興英国カトリック位階制の長としてのワイズマンの自負心があらわであり、国内の反カトリック感情をいやがうえにも煽り立てることになってしまったのである。以下に引用するのは、この司教教書中、今回の位階制復興が、ローマの霊的権威による侵略に他ならないと危惧させかねない箇所、英国プロテスタント論壇によって集中砲火を浴びた部分である。

We govern, and shall continue to govern, the

countries of Middlesex, Hertford, and Essex as ordinary thereof, and those of Surrey, Sussex, Kent, Berkshire, and Hampshire, with the islands annexed, as administrator with ordinary jurisdiction.¹¹

文中使用された "govern" は、単に教会行政上の意味しか担わず、決して政治的意味で使用されているのではないのだが、上記引用部分が引きがねとなって、翌1851年、カトリック司教に地名称号をつけることを非法化する Ecclesiastical Titles Act が成立することになる。シャーロットもこの教書に目を通していたらしく、ワイズマンが英国カトリック位階制を、長く運行を止めていた太陽に例えた¹²のをもじり、ヨシユアならぬワイズマンは太陽に静止せよといっただけではなく、6世紀逆戻りするよう命令したようなものだと痛烈に皮肉っている。¹³ 6世紀前とは失地王ジョンが『マグナ・カルタ』を承認して、史上最強の教皇インノケンティウス3世に膝を屈したあの13世紀である。

ラッセル卿もまた上記ワイズマン教書に対し、"the late aggression of the Pope upon our Protestantism" as "insolent and insidious"¹⁴ という有名な書き出しで始まる書簡をダーラム司教に送付している。これは、英国がプロテスタント宗教改革以来、ローマの霊的・世俗的圧政に抵抗し、国家と個人の自由を擁護しつつ、今日の帝国繁栄を築き上げたという Whig 史観に基づいており、英国プロテスタント感情の典型的発露といってよい。後に教皇グレゴリウス7世となるヒルデブラントの祝福を受けてイングランドに侵攻したノルマンディー公ウイリアム以来、アングロ・サクソン人の愛国心を最も苛だたせるのは、外国からの政治的、宗教的抑圧なのである。

The liberty of Protestantism has been enjoyed too long in England to allow of any successful attempt to *impose a foreign yoke upon our minds and consciences*. No foreign prince or potentate will be at liberty to fasten his fetters upon a nation which has so long and so nobly vindicated its right to freedom of opinion, civil, political, and religious. ... the great mass of a nation

... looks with contempt on the mummeries of superstition, and with scorn at the laborious endeavours which are now making to *confine the intellect and enslave the soul*.¹⁵

このようにラッセルは、ローマ・カトリックの霊的権威を、国家と個人の自由、個人の理性と魂への抑圧と見なし批判しているのだが、*Villette* 作品中にも、マダム・ベックの寄宿学校で行われるカトリック信仰講話が、"a wholesome mortification of the Intellect, a useful humiliation of the Reason"¹⁶にほかならず、またローマ・カトリックの教育方針全般について以下のように痛烈な批判がなされているのは、ラッセル卿と同様、シャーロット自身にとっても、ローマ・カトリックの霊的権威が、個人の魂と理性を隷属させるものとして把握されているからなのである。

Great pains were taken to hide chains with flowers: a subtle essence of Romanism pervaded every arrangement: large sensual indulgence (so to speak) was permitted by way of counterpoise to jealous *spiritual restraint*. Each mind was being reared in *slavery*; but, to prevent reflection from dwelling on this fact, every pretext for physical recreation was seized and made the most of. There, as elsewhere, the CHURCH strove to bring up her children robust in body, *feeble in soul*, fat, ruddy, hale, joyous, *ignorant, unthinking, unquestioning*. "Eat, drink, and live!" she says. "Look after your bodies; leave your souls to me. ..."¹⁷

"unthinking", "unquestioning" とは、今日の我々から見ると随分と手酷い表現だが、ニューマンが英国国教会時代からの朋友 Edvard Bouverie Pusey (1800- 1882) に宛てた書簡に、"[to] think deeply ... which Catholics are not in the habit of doing, for they take things on trust"¹⁸ と半ば自笑的に書き送っているのを見ると、当時英国人のカトリック観として、さほど奇異なものではなかったのかもしれない。Gerin も指摘しているように、シャーロットのベルギー人への酷評は、当時「アングロ・サクソ

ン)としての英国人が「ラテン」カトリック諸国に持っていた偏見に他ならず、¹⁹ニューマン1850年の講演集*Certain Difficulties Felt by Anglicans in Catholic Teaching*には、"Social State of Catholic Countries no Prejudice to the Sanctity of the Church"²⁰と題した講演がわざわざ入れられているのからも窺える通り、当時としてはさほど極端なものではなかったのである。

ものを深く考え、疑問を持つプロテスタントは、カトリック信徒のM. Paulに言わせれば、"self-will", "their pedantic education, their impious scepticism(!), their insufferable pride, their pretentious virtue"²¹に満ちていて我慢ならんという訳だが、これだけの悪口を浴びせかけられたルーシーが、普段の冷静を失い、自国の英雄と歴史に対し『英国万歳』を叫んでしまう²²のも、ラッセル卿ダーラム書簡に見られようなWhig史観に基づく愛国心を、シャーロットもまた共有しているからなのである。

さて同ラッセル書簡は更に、『三十九箇条』に署名し、女王に忠誠を宣誓した英国国教会聖職者の一部がこのところ、急速にローマに傾斜しており、教会の不可謬性を主張し、ローマ的な迷信に満ちた礼拝、告解を信徒に奨めて、英国国教会を裏切っているとして、批判の矛先を上記E.B. ビュージー等、国内高教会派やRitualistsに向けている。²³シャーロットはこのラッセル書簡についても以下の手紙を残している。少し長いが引用してみよう。引用中登場するDr. Arnoldは、1830年代にやはりローマ・カトリックへ急速に傾斜していった高教会トラクト派を徹底的に批判したThomas Arnoldを指す。

I have read Lord John Russell's letter with very great zest and relish, and think him a spirited sensible little man for writing it. He makes no old womanish outcry of alarm and expresses no exaggerated wrath. One of the best paragraphs is that which refers to the Bishop of London and the Puseyites. Oh! I wish Dr Arnold were yet living or that a second Dr Arnold could be found. Were there but ten such men amongst the Hierarchs of the Church of England, she might bid defiance to all the scarlet hats and stockings

in the Pope's gift. Her sanctuaries would be purified, her rites reformed, her withered veins would swell again with vital sap; but it is *not* [italics original] so.

It is well that *Truth* is indestructible; that Ruin cannot crush nor Fire annihilate - her divine essence; while forms change and institutions perish *Truth* is great and shall prevail.²⁴

英国国教会主教団に現在アーノルドのような人物がいたとすれば、枢機卿の緋色の帽子などはきっぱりと拒絶して、英国国教会のローマ信奉者も一掃されるであろうにという訳である。シャーロットは、英国国教会の"divine essence"としてのプロテスタント主義を『真理』と呼んでいる。ここで注目したいのは、*Villette* 第39章、イエズス会士のシラー神父、作品中ルーシーからイグナチアと評される²⁵マダム・ベック、そして資産家マダム・ヴァルラヴァンによる陰謀の全容が明らかになった後、主人公ルーシーの魂の主人となるのも同じく『真理』と呼ばれている点である。

Truth, you are a good mistress to your faithful servants! While a Lie pressed me, how I suffered! Even when the Falsehood was still sweet, still flattering to the fancy, and warm to the feelings, it wasted me with hourly torment. ... *Truth* stripped away Falsehood, and Flattery and Expectancy, and here I stand - free!²⁶

この場面で使われている狭義の『真理』とは、ムッシュ・ボールの婚約者(とルーシーが誤解した)、ジュスティース・マリの登場によって、ルーシーが心密かに望んでいた愛への期待が打ち砕かれてしまったことをいう。偽りの期待は、甘く、想像力と感情に訴えかける一方で、不安なルーシーを毎刻毎刻さいなみ続ける。しかし、ムッシュ・ボールに年若い婚約者が存在するのを知った後は、全ての偽り、期待を粉碎され、ルーシーは初めて魂の自由を得るのである。しかし、*Villette* 第39章の『真理』の描写は、シャーロットが書簡で使用した、プロテスタント『真理』と読み替えても、作品内で一貫した解釈を提供する。

即ち、このプロテスタント『真理』は、イエズス会士とカトリック信徒たちによる財産目当ての陰謀を暴き出したばかりでなく、この『真理』がルーシーの魂で勝利を収めたことによって、カトリック教会が魂に課す偽まんに満ちた禁欲主義から彼女を解放し、彼女は初めて、魂の奥に育まれていたムッシュ・ポールへの愛を率直に認めることができたのである。またこの場面の直後には、これまでドクタ・ジョン、ムッシュ・ポールへの愛を抑圧するかのように、ルーシーを悩ませ続けた「修道女」の亡霊の正体が明らかにされるからである。

従って上記引用箇所のもう一つの解釈は、ローマ・カトリックの『嘘』は、様々な形で、ルーシーをを苦しめ、一方ローマ・カトリックの『虚偽』も一見甘い外観で、想像力と心情に訴えかけてルーシーを誘惑しようとしたのだが、今やルーシーの魂の主となったプロテスタント『真理』は、これらの『嘘』と『虚偽』からルーシーを真に解放し、ルーシーは、個人として、魂と理性の自由を回復するのである。以下Section IIでは、一見甘い外観で、想像力と心情に訴えかけるカトリックの『虚偽』とは何か、Part (2) Section IIIでは、英国反カトリック論壇によって、何故カトリックと『嘘』、『虚偽』が結び付けられたのかを当時の神学的著作から検証し、Section IVでは、作品中、ルーシーそしてムッシュ・ポールをさえ苦しめたカトリックの『嘘』の正体は何かを考察する。

II. ウルトラモンタニズムの虚偽

一見甘い外観で、想像力と心情に訴えかけるカトリックの『虚偽』とは何か。まず心情に訴えかけるカトリックの『虚偽』から見てみよう。ルーシーと兄妹の約束を交したムッシュ・ポールが、何とか彼女をカトリックに改宗させることはできないものと、彼女の引き出しに、説教集、教理に関する冊子を置いていく。ルーシーの感想は以下の如くである。

It was milk for babes; the mild effluence of a mother's love towards her tenderest and her youngest; intended wholly and solely for those whose head is to be reached through

the heart. Its appeal was not to intellect; it sought to win the affectionate through their affections, the sympathizing through their sympathies; ... I was amused with the gambols of this unlicked wolf-club muffled in the fleece, and mimicking the bleat of a guileless lamb. Portions of it reminded me of certain *Wesleyan Methodist* tracts I had once read when a child; they were flavoured with about the same seasoning of excitation to fanaticism²⁷

ここで説明されているのは、カトリックの説教集である。一見甘いその語調は、感情と愛情に訴えかけて、人々を改宗に誘うが、ローマのこうかつさは、それが本来的に持つ抑圧や強制を覆い隠してしまうのだ。

さて、シラー神父による霊的指導が失敗に帰した後、最後にムッシュ・ポールは、ルーシーをカトリックの典礼や儀式に連れていく。しかし彼女はこれも "the pomp of Rome" として断固退ける。

Many people - men and women - no doubt far my superiors in a thousand ways, have felt this display impressive, have declared that though their Reason protested, their Imagination was subjugated. I cannot say the same. Neither full procession, nor high mass, nor swarming tapers, nor swinging censers, nor ecclesiastical millinery, nor celestial jewellery, touched my imagination a whit. What I saw struck me as tawdry, not grand; as grossly material, not poetically spiritual.²⁸

前セクションで引用した様に、ルーシーが途方もない感覚性を自らに許すと評したローマ・カトリックは、盛式ミサ、聖体行列、音をたてて揺れる香炉、金糸が輝く司教冠、薄暗い礼拝堂や御像の前で洪水のようにゆらめくろうそくと、五感全てを挙げて魂を圧倒しようとする。このような "large sensual indulgence"²⁹ に対し、理性は抵抗するけれども、想像力はこれに屈してしまうと引用中言及されているのは、F.W. Faber等、ケンブリッジ、オックス

フォード出身の高名なカトリック改宗者の一部を指しており、彼等はワイズマンの支援の下、メダイ、スカブラの着用等ローマの慣習や、聖遺物、奇跡信心など大陸で隆盛していたウルトラモンタニズムの信心形式を積極的に英国に導入したのである。³⁰

反対に、ウルトラモンタニズムが持つ感覚性を、英国国民性とは相入れない"the pomp of Rome"として嫌悪を感じるシャーロットのような人達が、プロテスタントばかりでなく、Old Catholicsと呼ばれる英国の伝統的なカトリック信者の中にも多数存在した。³¹以下に引用するのは、1845年にカトリックへ改宗し、トラクト運動の屋台骨を揺るがしたニューマンへ、改宗に際し、カトリックのミサや信心形式にとまどい霊的指導を求めた一女性へ宛てたニューマンの返信である。ニューマンは同じ『真理』という言葉や、カトリックの救済真理という意味で使っている点興味深い。改宗を決心していても、カトリックの持つ感覚性につまづいてしまう人もいたのである。

The greatest trial a Convert has to sustain, and to women it is often greater than to men, is the strangeness at first sight of every thing in the Catholic Church. Mass, devotions, conversation, all may be a perplexity to you, so I am not at all surprised at what you say about the Mass. Every nation, every body of people, has its own ways - Catholics have their own ways - we may not at first like them - and the question is where is religious *Truth*, where is salvation? - not is this habit, this fashion pleasant to me or not?³²

ワイズマンは、ローマ滞在22年間に薫陶を受けたウルトラモンタニズムをカトリックの理想とし、Old Catholicsよりは改宗者を重用して、ニューマン、Henry Manning等、オックスフォード出身の著名な改宗者を、カトリック司祭として再養成するためローマに派遣、かれらをオラトリオ会、オペレート会等、イタリア系修道会の英国初代管区長として英国に呼び戻した。³³ワイズマンは更に、英国での司祭養成権を掌握するのに成功、国内にローマの神学校をモデルとした神学校を創設して、英国古来のガリカニズム(教皇権制限主義)を一掃し、国内に

大陸的ウルトラモンタニズムを定着させようと腐心するのである。³⁴こうしてワイズマンは英国プロテスタント、また英国カトリックにとっても、大陸ウルトラモンタニズムの旗手として、位階制復興後の初代ウエストミンスター大司教位に、この後15年間君臨するのである。³⁵

McGlameryも指摘するように、シャーロットは大司教就任後のワイズマンを2回見る機会があったらしい。³⁶シャーロットは、ウルトラモンタニズムの旗手として派手な行動をするワイズマンをよく観察している。まずは、その想像力に訴える『虚偽』の側面だが、彼女はワイズマンが派手に自らの霊的権威を顕示する姿を"impiously theatrical"と評す。

On Sunday I went to the Spanish Ambassador's Chapel - where Cardinal Wiseman in his Archiepiscopal robes and mitre held a Confirmation - The whole scene was impiously theatrical.³⁷

当時のワイズマンを別の証人に語ってもらうことにしよう。司教教書"Out of the Flaminian Gate"が引き起した世論沸騰のために、すぐには英国へ帰国できなかったワイズマンが11月12日初めてロンドンの群集の前に姿を現わした時の状況を、伝記作家のWilfrid Wardは以下の様に記す。ワイズマンが馬車と数多くの従者を従えて移動するのは当時から有名である。

Exactly at eleven o'clock, however, a private carriage drawn by a pair of greys was driven to the entrance of the clergyman's residence attached to St. George's Chapel, from which the Cardinal alighted, attended by his chaplain, who carried a small leather portmanteau and a large packet of letters. His Eminence, who appeared in excellent health, was enveloped in a large blue cloak and had a superbly bound Roman missal in his hand.³⁸

ここでワイズマンが典礼書を持って、とあるが、1791年には一時、御絵、十字架、ミサ典礼書、ロザリオ、聖務日課書等を受領した者に罰則を賦課するpraemunireが制定されたこともあり、この法令で禁

止されていたカトリックのattributeをこれ見よがしに持つワイズマンの姿は、挑発的としか思われぬものがあり、Antonelli枢機卿の懸念もむべなるかなである。

Villetteには、屋敷のバルコニーからルーシーが見物する教会と軍隊の行列に、でっぶり太った大司教³⁹が登場するが、このモデルは案外ワイズマンかもしれない。ワイズマンには、四旬節に魚料理を4コースもふるまって、招待された高教会派の来客を啞然とさせたという逸話が残っているが、⁴⁰以下のシャーロットの描写にはこの逸話をほう沸とさせる風刺がある。これはカトリックが途方もない感覚的放縱を自らに許す、またもう一つ別の側面である。文中ヴィンセンシオ・ア・パウロ会とあるのは、エジェ氏も所属していたカトリックの信徒団体である。

Yesterday I saw Cardinal Wiseman and heard him speak. It was at a meeting for the Roman Catholic Society of St. Vincent de Paul; the Cardinal presided. He is a big portly man something of the shape of Mr Morgan; he has not merely a double but a treble and quadruple chin; he has a very large mouth with oily lips, and looks as if he would relish a good dinner with a bottle of wine after it.⁴¹

シャーロットの筆は続けてワイズマンのウルトラモンタニズムのaggressivenessを鋭く指摘する。英国Old Catholicsが、英国国教会トラクト派のローマ傾斜に懐疑的な態度しか示さなかったのに対し、ワイズマンはこれら高教会派と積極的に対話を進め、ローマ英国学寮時代から、K.H. Digby, A.W. Pugin, George Ignatius Spencer, Ambrose Phillipps de Lisle, 更にトラクト派のH. Froude, F.W. Faber, W.G. Ward, 後に自らの後継者となるマニング等、英国の高名な人物と接触を保ち、彼等の一部を次々と改宗に導いた。この改宗者達が中期ヴィクトリア朝で果たした役割は、カトリックを英国に定着させる上で欠くことのできないものであり、この点ワイズマンの卓見は高く評価されるべきであるが、⁴²こうした自負心を持つワイズマンの姿をシャーロットの筆は容赦無くえぐり出す。ここでワイズマンは、人を狂信に駆り立て改心

を迫るメソジスト説教師さながらの弁術で⁴³聴衆に英国改宗を訴えていたと描写されているが、この表現は、ムッシュ・ポールが与えた説教集に対するルーシーの感想と全く同じである。

He was dressed in black like a bishop or dean in plain clothes, but wore scarlet gloves and a brilliant scarlet waistcoat. A bevy of inferior priests surrounded him many of them very dark-looking and sinister men. The cardinal spoke in a smooth whinnying manner, just like a canting *Methodist preacher*. The audience seemed to look up to him as a god. ... All the speeches turned on the necessity of straining every nerve to make convertsto popery. It is in such a scene that one feels what the Catholics are doing. Most persevering and enthusiastic are they in their work! Let Protestants look to it.⁴⁴

大陸ウルトラモンタニズムの積極性は、これにとどまらず、ワイズマンの影響を受けた上述のFr. Ignatius Spencer, Phillipps de Lisleらが⁴⁵1838年、大陸の教会一致運動に呼応して、英国全体のカトリック改宗を求める"Crusade of Prayer"を開始しているのにも窺われる。⁴⁵シャーロットも作品中で、ルーシーの口を借り、シラー神父、ムッシュ・ポールをはじめとしてローマ・カトリックというのは、父祖の宗教から自分達プロテスタントを改宗させたがる不思議な人々だと⁴⁶嘆息している。これは勿論シャーロットのブリュッセル体験が反映しているところでもあろう。これについてはセクションIVでも言及する。

では、シャーロットにとって、これら虚飾の下にあるカトリック教会の実像は何か。制度としてのローマ・カトリック教会は、霊的権威の名を借りて、その実、どん欲なまでに世俗的支配権を渴望する野心の権化であるというのである。

Poverty awas fed and clothed, and sheltered, to bind it by obligation to "the Church;" orphanage was reared and educated that it might grow up in the fold of "the Church;" sickness was tended that it might die after the

formula and in the ordinance of "the Church;" and men were over-wrought, that they might serve Rome, prove her sanctity, confirm her power, and spread the reign of her tyrant "Church." ... and all for what? That a Priesthood might march straight on and straight upward to an all-dominating eminence, whence they might at last stretch the sceptre of their Moloch "Church."⁴⁷

これもまた随分と手厳しい表現であるが、引用中最後の部分は、折しも台頭しつつあった教皇至上主義、ウルトラモンタニズムの中央集権化がシャーロットの筆によつて的確にとらえられていて興味深い。

さて、ローマの虚偽に欺かれなかったのは、ルーシーだけではない。作品中、ルーシーと同じ星の下に生れたと言われているムッシュ・ポールも、ローマのこうかつさや感覚性によって欺かれることなく、理性を持った自由人に留まり、彼が生来持っていた高潔さを損なわれることはなかったのだと語り手は言う。

All Rome could not put into him bigotry, nor the Propaganda itself make him a real Jesuit. He was born honest, and not false - artless, and not cunning - a freeman, and not a slave.⁴⁸

上記の引用の裏を返すと、イエズス会士は "dishonest," "false," "artful," "cunning," "slave" となる訳だが、これらは当時プロテスタント英国人が、イエズス会士をはじめとするカトリック司祭一般に対して持っていた偏見の集約であると言ってよい。この点については、何故英国反カトリック論壇で、カトリックと『嘘』、『虚偽』が結び付けられたのかを扱うPart (2)で詳説する。

最後に、ローマ教皇やイエズス会の『虚偽』に対する従順のために、知性と『真理』が抑圧されてしまうという図式は、以下に引用するThomas Carlyleのパンフレットにも明確に打ち出されており、ヴィクトリア朝プロテスタント英国人のカトリック観のひとつを窺い知ることができる。

"Jesuitism"と題されるこのパンフレットは、英国カトリック位階制復興直前、1850年8月のものである。イエズス会士は、従順、貞潔、清貧の三つの誓願の他に、言わば第四の誓願としてローマ教皇への忠誠を誓っていたことを頭に置いて以下の引用を分析してみよう。

I hear much also of 'obedience,' how that and the kindred virtues are prescribed and exemplified by Jesuitism; the truth of which, and the merit of which, far be it from me to deny. ... Obedience is good, and indispensable: but if it be obedience to what is wrong and false, - good Heavens, there is no name for such a depth of human cowardice and calamity; ... Loyalty? Will you be loyal to Beelzebub? ... The virtues of Jesuitism, seasoned with that fatal condiment, are other than quite virtuous! ... to put-out the sacred lamp of Intellect within you; to decide on maiming yourself of that higher godlike gift, ... ; to be bullied and bowowed out of your loyalty to the God of Light by big Phantasms and three-hatted Chimeras: ...⁴⁹

ここでもまた、ラッセル卿やシャーロットと同様、ローマ・カトリックは、知性の灯き吹き消し抑圧するものであり、『虚偽』であるローマ教皇冠や、感覚性で人を欺く幻影によって、光である神への従順がねじ曲げれてしまうと主張されているのである。Part (2)では、特に当時のカトリック倫理神学の分析によって、何故英国プロテスタント論壇によって、カトリックと『嘘』、『虚偽』が結び付けられたのかを扱うことにする。

(Part (2)に続く)

註

*文中イタリックは特に注記しない限り本考の著者による。

1. G.F.A. Best, "Popular Protestantism in Victorian Britain." *Ideas and Institutions of Victorian Britain*, ed. Robert Robson (London:

- G. Bell & Sons, 1967) 115-142. E. R. Norman, *Anti-Catholicism in Victorian England* (London: George Allen and Unwin, 1968). Walter L. Arnstein, *Protestant versus Catholic in Mid-Victorian England: Mr. Newdegate and the Nuns* (Columbia: University of Missouri Press, 1982). John Wolfe, *The Protestant Crusade in Great Britain, 1829-1860* (Oxford: Clarendon Press, 1991). D.G. Paz, *Popular Anti-Catholicism in Mid-Victorian England* (Stanford, California: Stanford University Press, 1992).
2. Winifred Gérin, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius* (Oxford: Clarendon Press, 1967). 181-255.
 3. Nicholas Wiseman, "Out of the Flaminian Gate," *English Historical Documents 1833-1874* Volume IX Part (1) eds. G.M. Young and W.D. Hancock (London: Eyre & Spottiswoode, 1956) 364-367.
 4. Lord John Russell, "Durham Letter." G.M. Young and W.D. Hancock eds., op. cit., 367-369.
 5. Paz, op. cit., p. 11.
 6. Juliet Barker, *The Brontës* (London: Weidenfeld and Nicholson, 1994) 662.
 7. James Wise & J. A. Symington eds., *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondences* Volume IV (Oxford: Shakespeare Head Press, 1931) 14. 以下 *Lives*, SHE と略す。George Smith 宛 1852年10月30日付書簡。
 8. Charles Burkhart, "The Nuns in *Villette*," *The Victorian Newsletter* 44(1973): 8-13. Rosemary Clark-Beattie, "Fables of Rebellion: Anti-Catholicism and the Structure of *Villette*." *The Brontë Sisters: Critical Assessments* Volume III ed. Eleanor McNeese (East Sussex, Helm Information, 1996) 785-806. Kate Lawson, "Reading Desire: *Villette* as 'Heretic Narrative,'" *English Studies in Canada* 17 (1991): 53-71. Gayla McGlamery, "'This Unlicked Wolf-Club': Anti-Catholicism in Charlotte Brontë's *Villette*," *Cahiers Victoriens et Edouardiens* 37 (1993): 55-71. Susan David Bernstein, *Confessional* *Subjects: Revelations of Gender and Power in Victorian Literature and Culture* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1997) 41-72.
 9. 高柳俊一他, 『新カトリック大事典』第1巻 (研究社、1996年) 710.
 10. J. Derek Holmes, *More Roman than Rome: English Catholicism in the Nineteenth Century* (London: Burns & Oates, 1978) 87.
 11. Wiseman, op. cit., p. 365.
 12. Ibid., p. 366.
 13. *Lives*, SHE III. pp. 175-176. George Smith 宛 1850年10月31日書簡。ワイズマン教書に関するシャーロットの見解については、McGlamery, op. cit., pp. 60-61を参照。
 14. Russell, op. cit., p. 367.
 15. Ibid., pp. 368-369.
 16. Charlotte Brontë, *Villette* Volume I. (Oxford: Shakespeare Head Press, 1931) 144. 以下小説の引用は全て Shakespeare Head Edition (*Villette*, SHE と略す) に拠る。尚、翻訳にあたっては『ヴィレット(上)(下)』青山誠子訳 (みすず書房、1995年)を参照した。
 17. Ibid., SHE I. p. 158.
 18. C.S. Dessain and T. Gornall eds. *Letters and Diaries of John Henry Newman* vol. xxv (Oxford: Clarendon Press, 1973) 292. E.B. Puseys 宛て 1871年2月26日付け書簡。以下 L & D と略す。
 19. Gérin, op. cit., pp. 206, 222.
 20. John Henry Newman, *Certain Difficulties Felt by Anglicans in Catholic Teaching, considered in twelve lectures addressed in 1850 to the party of the religious movement of 1833*. vol. I (London: Longmans, Green and Co., 1918) 229-260.
 21. *Villette* SHE II. pp. 66, 113.
 22. Ibid., SHE II. p. 114.
 23. Russell, op. cit., p. 368.
 24. *Lives*, SHE III. p. 179. W.S. Williams 宛て 1850年11月9日付け書簡。ラッセル書簡に関するシャーロットの見解についても、McGlamery, op. cit., p. 62参照。
 25. *Villette* SHE I. p. 86.

26. Ibid., SHE II. pp. 278-279.
27. Ibid., SHE II. pp. 208-209.
28. Ibid., SHE II. p. 218.
29. 註17参照。
30. Holmes, op. cit., p. 62. Edward Norman, *The English Catholic Church in the Nineteenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1984) 142-145.
31. Holmes, op. cit., pp. 48-49.
32. L & D vol. xxiv. p. 41. Miss Ellen Fox宛 1868年2月25日書簡。
33. Holmes, op. cit., pp. 66, 69, 91.
34. Holmes, op. cit., pp. 70, 88, 92-93. Norman, op. cit., pp. 131-132.
35. Norman, op. cit., p. 128.
36. McGlamery, op. cit., pp. 62-63.
37. *Lives*, SHE III. p. 251. Ellen Nussey宛 1851年6月24日書簡。
38. Wilfrid Ward, *The Life and Times of Cardinal Wiseman*. Vol. I. (London: Longmans, Green, and Co., 1912) 555-556.
39. *Villette*, SHE II. p. 218.
40. Holmes, op. cit., p. 87.
41. *Lives*, SHE III. pp. 248-249. Rev. P. Bronte宛 1851年6月17日書簡。
42. Holmes, op. cit., pp. 56, 64-66, passim. Norman, op. cit., pp. 149-150, passim.
43. 註27参照。
44. *Lives*, SHE III. p. 249. Rev. P. Brontë宛 1851年6月17日書簡。
45. Norman, op. cit., pp. 212-213.
46. *Villette*, SHE II. p. 216.
47. Ibid., SHE II. p. 217.
48. Ibid., SHE II. p. 311.
49. Thomas Carlyle, "Jesuitism" in *The Works of Thomas Carlyle* H.D. Traill ed. Volume 20: *The Latter-Day Pamphlets*. Rept. (New York: AMS Press, 1974) 308.

(受理 平成10年3月20日)